追憶馬淵 ▸

巧遇與懷念馬耳東風

馬耳東風にめぐり合い、そして偲ぶ

마부찌도이치와 조우(遭遇)하다. 그리고 생각.
Encountering and Thinking of Mabuchi Toichi

文｜魏德文（南天書局發行人．台灣古地圖史料文物協會常務理事）
日本語翻譯｜森田健嗣

於2008年8月29～30日，政大原住民族研究中心舉辦首屆「台日原住民族研究論壇」，該會讓台灣與日本多年來的台灣原住民族研究成果得以交流，也讓在學的學生有參與的機會。本人從事不少有關原住民研究的出版，也很榮幸連續兩年受邀參加會議。其中最感興趣的，是去年笠原政治教授的講題〈馬淵東一與台灣原住民研究〉，對馬淵教授的背景交待非常詳細，也勾起我30年前與馬淵教授相處的一段往事。

我與馬淵東一相識的因緣

與國際大師級人類學家馬淵東一教授巧遇的這段過往，可溯源至1976年。我曾去函瀨川孝吉先生，希望重刊他與鹿野忠雄合著的*An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines, Vol. 1 The Yami* (1956)（以下簡稱《雅美族圖誌》）。不久即收到回函，信中提及正要進行

2008年8月29～30日、政治大学原住民族研究センターは第1回「台日原住民族研究フォーラム」を開催した。このフォーラムは台湾と日本の長年にわたる台湾原住民族研究の成果を交流させ、在学中の学生に参加する機会を与えるものである。私は多くの原住民研究関係の出版に携わってきており、2年続けて招かれ会議に参加できることを光栄に思っている。とくに興味深いのは、昨年、笠原政治教授の「馬淵東一と台湾原住民研究」という講演の中で、馬淵教授についての背景説明がとても詳しかったことであり、私が30年前に馬淵教授とともにしたあの頃を思い描いた。

私と馬淵東一が知り合ったゆかり

世界的レベルの人類学者である馬淵東一教授との出会いは、1976年までさかのぼることができる。私は瀬川孝吉先生に手紙を出し、鹿野忠雄との共著である*An Illustrated Ethnography*

政大原住民族研究中心

該書的增訂。

在此同時，徐瀛洲先生所收藏的原住民族服飾，在日本的女子文化大學博物館展出，他也與瀨川見過面。徐先生返台後即與我聯繫，並告知將進行《雅美族圖誌》的增訂計畫。

其後不久，瀨川先生來台共同商討計畫的進行，並再次造訪蘭嶼。同行有我、瀨川孝吉、徐瀛洲、宋文薰院士、連照美教授等5人。初步瞭解蘭嶼自戰後30年來，在外來文化衝擊下已出現變化，對照日本時期所拍攝的傳統老照片，更期望能儘早執行增訂工作。

30年前初見馬淵東一

初次與馬淵教授見面應是1979年8月。先抵台的瀨川與我一同到松山機場接機，下榻農安街鑽石飯店，此行他也參加李濟先生的告別式。

馬淵教授此行來台是因《雅美族圖誌》自1976至1979年間已進行增補與編輯工作。而原版是以英文出版，增訂部分須要有人類學素養及英譯能力兼備的人才。瀨川先生推薦馬淵教授加入共同撰著的工作，因為他在台北帝大

筆者於池上掃墓時，以自己釀的酒向馬淵東一致意。（圖片提供：編輯部）

池上の墓参りにて自家製の酒で馬淵東一に敬意を表する筆者。

of Formosan Aborigines, Vol. 1 The Yami (1956)(以下、『ヤミ族図誌』)を復刊するよう希望していた。しばらくすると返事が届き、手紙にはちょうど同書の改訂増補を進めているところだ、ということが記されていた。

また、徐瀛洲先生が収蔵している原住民族の服飾は、日本の女子文化大学博物館で展示されており、彼は瀨川先生と会ったことがある。徐氏は台湾に戻ってからただちに私と連絡をとり、『ヤミ族図誌』の改訂増補計画を進めることを伝えてくれた。

まもなく、瀨川先生が来台し共同で計画の進行について議論し、そして再び蘭嶼を訪れた。一緒に訪れたのは私、瀨川孝吉、徐瀛洲、宋文薰院士、連照美教授ら5人であった。蘭嶼における戦後30年来の外来文化の衝撃による変化に対して初歩的な理解を進めるため、日本統治時代に撮影された古い写真と比較し、早く改訂増補が進められるようさらに願った。

30年前に馬淵東一と初めて出会う

初めて馬淵教授と出会ったのは1979年8月であった。先に台湾に到着していた瀨川と私が共に松山空港へ出向かえに行き、農安街のダイヤモンド・ホテルに投宿した。このとき彼も李済先生の告別式に参列した。

馬淵教授がこの時来台したのは、『ヤミ族図誌』が1976年から1979年までの間に、すでに増補編集作業が行われていたためである。原版は英語で出版されており、改訂増補された箇所は人類学の素養があり、英語翻訳能力を兼ね備えた人材が必要だった。瀨川先生は馬淵教授を共同著作の仕事に推薦した。それは彼が台北帝国大学時代に蘭嶼のヤミ族調査を行ったことがあり、英語能力も十分だったからである。それからは彼は何度も来台し、ある時は台湾に留ま

在雅美紅頭社駐所前的合照。前左起宮本延人先生、後藤武夫警官、小此木忠七郎先生、移川子之藏教授；後左起田中警官、鹿野忠雄先生、馬淵東一先生。（台灣大學人類學系系藏）
ヤミ族イモロッド社駐在所の前での集合写真。前列左より宮本延人氏、後藤武夫警官、小此木忠七郎氏、移川子之藏教授、後列左より田中警官、鹿野忠雄氏、馬淵東一氏。

期間即做過蘭嶼雅美族調查且英文能力不錯。自此之後，他多次來台，有次停留台灣時間較長，日本社會思想社要出版《馬淵東一全集》補編時，出版社編輯還專程親自來台找他商討內容問題。

為增訂《雅美民族圖誌》而再訪蘭嶼時，馬淵教授特別到台東找他在1929年與移川子之藏、宮本延人、鹿野忠雄及小此木忠七郎等多位教授一同至蘭嶼調查（見《人類學玻璃版影像選輯》，頁49照片）時，紅頭社駐在所的警員後藤武夫（卑南族），邀他隨行擔任雅美語的翻譯。不過那時後藤武夫已年邁、有八十餘歲，因長期未講雅美語而完全忘光了。當年後藤因要陪移川等人到蘭嶼各社調查，翻譯日語及雅美語，所以由馬

る時間が長くなったため、日本社会思想社が『馬淵東一全集』出版の編集をしている時、出版社の編集者が内容について話し合いをするために自ら来台している。

『ヤミ民族図誌』の改訂増補のため再び蘭嶼を訪れた際、馬淵教授は特に台東へ赴き、1929年に移川子之蔵、宮本延人、鹿野忠雄、小此木忠七郎ら教授と共に蘭嶼で調査を行った際の(『人類学玻璃版影像選輯』49頁の写真を参照)紅頭社駐在所の警察である後藤武夫(プユマ族)を訪ね、彼に随行してもらいヤミ語の通訳をしていただこうとした。しかしその時すでに後藤武夫は高齢で80歳を超えており、また長い間ヤミ語を話していないので完全に忘れてしまっていた。その昔、後藤は移川らによる蘭嶼各社での調査に付き添い日本語とヤミ語の通訳にあたったため、馬淵に蕃童教育所での教育を代わってもらったことがある。

私の知っている馬淵

馬淵教授について最も深く印象に残っていることは、学術研究に対してとても厳しかったことだ。彼は東京都立大学で教鞭をとっていた時、全ての民族学の博士論文審査を務めた。また、彼は決して博士を取得せず、学士として博士の審査にあたっていた。

しかしながら、生活や仕事において彼は人を笑わせることがとても好きだった。ある時、私

政大原住民族研究中心

淵代勞擔任蕃童教育所的教學。

我所認識的馬淵

對馬淵教授較深刻印象是他對學術研究非常嚴謹，他在東京都立大學任教時，所有民族學博士生畢業論文他都參加審查。此外，他還堅決不拿博士，而以學士來評審博士。

但在生活或工作中，他很喜歡搞笑。有一次我們去調查雅美族吃檳榔所配的石灰時，當地都利用海貝的殼用火煅燒後，再去研成粉末與檳榔食用。其貝殼的屬種請教博仁醫院張寬敏醫師，除了鑑定是長硨磲貝（Tridacna maxima），還說多食用動物石灰得口腔癌機率高。雅美語稱貝殼叫mabuchi，馬淵立即回道那是Mabuchi癌（馬淵癌）。

另有一年，宋文薰教授到筑波大學客座一年，當年在東京舉辦日本民族學大會，馬淵教授、徐瀛洲、徐韶仁（徐瀛洲的二女兒）及我皆有參加。會後十餘人一同聚餐，分開坐兩桌，交流不便，於是併桌，馬淵正坐在兩桌之間，他叫道：「太好了，兩邊可通吃」。

馬淵教授的酒量也是名氣不小，每次我到東京訪問瀨川時，他會邀約馬淵一起相聚，用餐時為他斟酒，從來不回拒，從來沒說過夠了，好像無底洞的漏斗。

此外他書寫信時，字很小，很難辨認，每當一個字一個字看，經常無法貫通意思，我會先抄寫一遍再來閱讀，較能知曉其意。

與馬淵教授在一起，隨時都有趣聞，他講琉球調查的趣事更是一籮筐，因與台灣無關，有機會再敘。贅言幾句，陳述馬耳東風軼事。◆

たちはヤミ族が檳榔を食べるときにつける石灰について調査した際、その土地では海の貝殻を火で焼いてから、粉末状にして檳榔と一緒に食していた。その貝殻の種類について博仁医院の張寛敏医師から教えを請い、シラナミガイ（Tridacna maxima）であると鑑定してもらい、動物石灰を多く食すと口腔癌になる確率が高くなることも教わった。ヤミ語では貝殻をmabuchiと呼ぶので、馬淵はすぐにそれはMabuchi癌(馬淵癌)だと答えた。

またある年、宋文薫教授が筑波大学で客員を一年務め、その年東京で開かれた日本民族学大会に、馬淵教授、徐瀛洲、徐韶仁（徐瀛洲の二女）、私が参加した。大会が終わってから10人余りで食事に行き、2つのテーブルに分かれたのだが、意志疎通に不便なのでテーブルをくっつけ、馬淵はちょうど両テーブルの間に座った。そして「よかった。両方とも食べられる」と言っていた。

馬淵教授が飲む酒の量は評判があり、毎回私が東京へ瀬川を訪ねる時、彼は馬淵を招いて一緒に食事していた。食事の時彼に酒を注いでも断ったことがなく、もう十分だと言ったこともない。まるで底なしのじょうごであった。

そのほかに、彼は手紙を書くときは字がとても小さく、見分けるのが難しかった。その字一つ一つを見ていっても意味を理解することができなかった。私はまず書き写してから読むことで、その意味を理解することができた。

馬淵教授と共にいると、いつでも面白い話があった。彼が話した琉球調査でのおもしろい話がさらにあるのだが、台湾とは関連がないため、機会があれば記すことにする。贅言のいくつかの言葉も、馬耳東風の優れていることを示しているのである。◆

政大原住民族研究中心